

私は今年は3年生を中心に英語の授業をしているのですが、一クラスだけ1年生を教えています。

カリキュラムの調整や授業計画などは1年生を中心に教えているベテランの先生にお任せしているのですが、久しぶりに担当する1年生の一クラスが、かわいくてならないのです。

それにみんな頑張っているのでテストの平均点がベテランの先生の担当しているクラスより少し良いのです。

色々こまめに提出物のノートなんかを直してあげたり、手間暇かけているから当たり前だと思うのですが…。

他のクラスに悪いかなって気もしますが、みんな頑張ってるからかわいくて…。

先生が生徒に手間暇をかける。生徒もそれに応えてがんばる。良い結果が得られる。そんな生徒がかわいくて、また先生もがんばる。理想的な好循環です。

黄金の絆という言葉があります。理想的な教育効果が生まれる条件のことです。

1. 先生が生徒の可能性を高らかに信ずる。
2. 生徒が自分の可能性を確信する。
3. 生徒が先生の指導を心から信ずる。

現実には、なかなか理想通りには行きませんが、好循環の出発点は先生が生徒を好きになり、生徒の可能性を心から信じてアクションを起こすことです。

しかし、クラスにはどうしても好きになれない生徒がいるものです。そしてそんなとき、先生は職業的な強迫観念から、その生徒を好きになろうと努力します。その結果「あの生徒を好きになるために、私はこんなに苦しんでいる」と云った本末転倒した気分になってしまうこともあります。

そんな場合の対処法を1つ書きます。まず、一枚紙を用意して、その生徒の「短所」を左側に箇条書きに思いつく限り書き出します。次にその項目一つ一つを長所に読み替えて、その項目の右側に書き出します。短所と長所は裏返しの関係にありますので、「反抗的である」は「自立心が強い」、「集中力がない」は「大らかでこだわりがない」などと書き換えるのです。先生は生徒の人物所見を書き慣れていきますので、難しい作業ではないはずですよ。

そしてできあがったリストの左半分を破り切って右半分だけ残し、きちんと清書して、見えるところに張っておきます。すると不思議なことなのですが、少しずつその生徒の印象が好ましいものになっていくのです。